

15  
パキスタン

日本人には見えにくい娯楽

深町 宏樹

パキスタンには娯楽が少ない」と現地在住の日本人の多くが言う。確かに、ゴルフやテニスなど日本人の慣れ親しんだ欧米スポーツのための高級施設は非常に限られているし、娯楽「産業」となると映画やレンタル・ビデオの他にはこれといったものは見当たらない。それは、一つにはイスラム教が歌舞音曲の類を蔑視するためでもあるし、また一つには、娯楽関係の仕事を生業とする者を低い社会層に位置づける伝統的身分社会が現存しているためでもある。しかし、現地社会に目を向けると娯楽そのものは決して少ないとはいえず、なかにはわれわれ日本人がどこかに置き忘れてきた遊びも見受けられる。以下では、娯楽産業だけでなく、パキスタンの風土が育んできた娯楽を概観してみよう。

## 通過儀礼のなかの娯楽

種々の通過儀礼のうち最も楽しく賑やかに行われるのは、やはり結婚式である。外壁など家の周囲は色とりどりの「無数の」豆電球でピョーッカピカピカと飾られる。豪邸を持たない人は路上（ただし大通りを除く）に天幕を張って披露宴を催す。道交法がどうのこうのと小うるさいことは誰も言わず、いかにもパキスタンらしいおおらかなひとときが流れる。

この国では、外出や娯楽の少ない女性たちにとって結婚式は大きな楽しみである。彼女らは男性立ち入り禁止の女性部屋で花嫁を囲んで（花嫁が席を立てている間も）夜更けまで歌い踊りまくって楽しむという。他方、男たちは着飾ったご婦人方とは違って普段着のまま、仕出し屋の作った食事を夜十時、十一時まで待たされる。パキスタン男性たちはそれでも楽しそうだが、筆者には一種の苦痛だといえないこともなかった。

## 詩会と散策

パキスタンのインテリたちは、古典的な叙情詩などを記憶していて、互いによく聞かせあっている。また、よく詩会（ムシャイーラ）が開かれている。そこでは自作の詩が発表され、立派なものを発表した人は「ワーワー」と喝采を受ける。筆者も詩会に出てみたことがあり、ウルドゥ語の詩が韻律を非常に重視しているらしいことだけは分かったが、あとは全くチンプンカンプンであった。詩会がパキスタン人にとっては非常に大切な娯楽であることは理解できるとしても、強い疎外感のため、私は詩会には二度と出ることはな

かった。

しかし、途中で抜け出した詩会の帰り道に立ち寄った公園で家族連れが夕暮れの散策を楽しんでいるのを見て、彼らに話しかけ、一緒に歩いてみた。成人女性としてはかなりな年齢の母親しかいなかったためか、その家族は私を怪しみもせず会話の輪に入れてくれ、夕暮れの散歩の楽しさについていろいろ語ってくれた。聞いたことのうち、一日の仕事のあと、その日も無事に過ぎたことをアッラーに感謝しながらそぞろ歩くとストレスが解消するのだということが印象的であった。

### イスラム教と娯楽

一九七七年七月に登場したジャー・ウル・ハック軍事政権はイスラム教重視政策を基本方針の一つとし、娯楽面でも厳しい制限措置を打ち出した。だが、すでにその前のブットー政権（七一年十二月～七七年七月）後半にはイスラム原理主義の興隆がみられ、例えばインド亜大陸イスラム教徒たちの古典舞踊として名高いカタック・ダンスがテレビや舞台から姿を消した。

だが一方では、イスラム神秘主義音楽（カッターリー）が盛んになった。カッターリーとは、数人の楽士たちがいろいろな楽器を奏でながらアッラーを称える歌を輪唱する宗教音楽である。だが筆者が見学したカッターリーの会は少し違っていた。その夜、パンジャブ州のカレアム・シャリーフ村のダルガー（イスラム神秘主義の聖者廟）でカッターリーを聞いていた村の



カレラム・シャリーフ村のカッワリー楽士たち

若者たちは、大声をあげて踊りはじめたのだ。突然の招かれざる日本人異教徒に実に美味な夕食をふるまいながら、村長むらぢやまはその理由を、「今夜は満月の木曜日だからおめでたいんじやよ」などと説明してくれた。私は、わざわざその夜を選んでくれた友人に感謝するとともに、やはりパキスタン人の心を理解するためにはこういう宗教行事を知らなくてはならないと、改めて考えさせられた。それらは彼らにとって神聖な行事であるとともに娯楽でもあるのだ。そして娯楽であるとともに神聖なことなのである。

似たような経験で、スーフイー（イスラム神秘主義の聖者）の命日祭を見学したときのことである。シンド州セヘワーン・シャリーフ村のスーフイー命日祭は神聖で荘厳である

とともに、全国から集まった人々にとってすばらしい娯楽でもあるようにみえた。はるか遠方より来た修行者とともに広大な墓地の片隅に「宿泊」したとき、修行者の弟子は大麻入りのタバコを吸いながら、この命日祭を「聖なる娯楽」と位置づける言葉を口にしていたようであった。

なお、正統派イスラム教でも宗教上のお祭りはやはり重要な娯楽でもある。

セヘワーン・シャリーフ村の命日祭に集まったのは、男ばかりだった。女装の人々もいたが、それは「ヒージュラー」（手術によって「両性具有者」になった男のこと）といわれる人々であり、ことほどさように奇妙な雰囲気になった命日祭であった。

だが、別の所で見たスーフイー命日祭はもうほとんどお祭りでは、昼間は成人女性も子供たちも来ていた。猿回しや熊使いなどの大道芸人はいるわ、出店はあるわ、いやあ大騒ぎだった。なかでも係りの者が観覧車の下の部分をあっちこっちに動いて体重の掛け方によって回転させる人力観覧車は子供たちの拍手喝采を浴びていた。また、「死の井戸」は直径一〇メートルほどの円筒の内側に遠心力を利用して車が張りついたように走り回るというもので、これも大喝采を浴びていた。

## 映画・風上げ・

### 伝統スポーツ……

何といってもパキスタンの娯楽の王者は長い間「フィルム」(映画)であった。パキスタン映画は単純な娯楽映画であり、庶民の最大の娯楽である。だが、娯楽映画としてもインド映画よりもかなり質が落ちるため、パキスタン人はインド映画の方を圧倒的に好み、テレビやビデオの普及もあってパキスタンの映画はいまや斜陽産業になっている。レンタル・ビデオ屋で扱っているものも大半はインド映画だ。テレビにしても、インドのテレビ電波の届く地域の人々は好んでインドの番組を見る。この他、娯楽「産業」ではないが、重要な娯楽としての風上げに触れないわけにはいかない。特にパンジャーブ州ラホール市の風上げの糸切り合戦はおもしろい。

パキスタン固有のスポーツには「北方地域」といわれる北部パキスタンにポロの原型がある。また、疾走する馬の上から槍で敵のテントの杭を刺し貫いてテントをつぶす「テント・ペッキング」は、大変な運動神経の持主にしかできないことだ。

さらに、一九七九年十二月のソ連による軍事侵入のためにアフガニスタンからパキスタンに流入してきたアフガン難民たちが、パキスタンの七千メートル級の秀峰を背景に見せてくれるブズカシ(ボズケシ)は、実に勇猛果敢なスポーツだ。首を落とした羊(または仔牛)を馬を走らせて奪い合うこの遊牧民のスポーツがパキスタン人の間でも流行ってほしいと思うのは、私だけではあるまい。